

日本聴力障害新聞はこんな風に作られます

13. データ修正・降版点検(校了)

点検専門の担当者が最後の確認をします。



小林一平さん
『紙の機関車』40ページに登場しています。

大阪本社の校正室の責任者です。聴力さんはレイアウト・色指定もきっちりしていただきありがとうございます。大切なお客様です。

編集部から京都営業所、大阪の本社へ。



編集長はパソコン上で紙のデータをします

12. 責了

何もなければこれが最後の校正作業。編集長にも最終の確認をとります。修正が多い場合は、「三校」の作業が発生します。

11. 再校

2回目の校正をします。

10. 原稿追加

メールなどで追加原稿・写真を提出。

9. 初校

文章やレイアウト、文字がおかしくないか、見出し、写真の位置や色はOKかなどを確認し、赤色ペンで校正指示を入れます。文章を追加・差し替えることもあります(結構大変なのです)。編集長にもグラを送信。

8. 校正グラが届く

京都営業所の方が届けにきてくれます。



7. 校正紙(グラ)出し

6. 画像補正

写真データは画像補正担当者に渡され、レイアウト・組版と並行して加工作業がおこなわれます。加工が終わると、サーバを通じてオペレーターに渡されます。

5. レイアウト・組版



村上武志さん

28年間オペレーターとして働いています。スラ運動に關わっている立場で日聴紙を作れるのは誇りです。是非月2回発行を！

サーバのデータと割付用紙の指定のもとに、オペレーターがパソコン上で紙面を作成していきます。このセクションでろう者の村上武志さんも働いています。

4. 編集・整理

割り付けとメールで送られてきた原稿が、きちんとあるかを確認します。文字化けの点検もします。印刷所内で共有しているサーバに確認済みデータを入れます。

『日本聴力障害新聞(日聴紙)』は1968年頃より、「関西共同印刷所(大阪本社、京都営業所)」で原稿のやりとりから印刷までをお願いし、一緒に作ってきました。この印刷所では『季刊みみ』も作っています。日聴紙ができるまで、どんな工程があるのでしょうか？

1. 原稿作成・編集

編集部や登録記者が取材したもの、加盟協会からいただいたものなどの記事材料をもとに、編集部担当職員が原稿を作成。使う写真や見出しもこのときに考えます。

2. 記事割り付け



出来た原稿と写真の配置を、所定の「割り付け用紙」に手書きで指定。



京都営業所の担当者が来所し、編集デスク職員と一緒に原稿を確認。原稿・写真データはメールやUSBメモリーなどでお渡し。



福井康衣子さん(福井生利) 日聴紙の担当になり、手やろうあ運動に關わるきっかけができました。まだまだ勉強不足、力不足を感じています。日聴紙は読者にとってなくてはならない新聞、社会で起る様々な問題に迅速に対応する姿勢に感心しました。



細川幸次さん(新聞)の手紙です 日聴紙さんはレイアウト指定まで完璧にこなされるので、助かるお客様です。手紙を一生懸命書きました。前アスワの松島さんにはいろいろと教えていただきました。

14. 刷版作成



昔は「フィルム」を使っていたが、今はCTP版やデジタルリソリ版の板を、直接転写します。

15. 印刷



CTP版に黒、藍(青)、赤、黄の順で色つけていき(上写真)、それをゴム製で円筒形の「ブランケット」に転写。ロール状になった紙に連続的に、印刷から断裁までおこないます。(下写真)



これで断裁しています

16. 梱包・仕分け・発送

できあがった日聴紙は、手で数えて500部ずつの束で梱包され、発送会社(個人読者と加盟協会宛)と編集部宛に分けて送られます。

読者のお手元に

今回はどんなニュースが載ってるかなあ



大阪 京都

大阪本社

編集部

京都営業所

大阪本社

編集部

京都営業所